

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372300907		
法人名	医療法人社団 博文会		
事業所名	グループホーム永の郷		
所在地	熊本市南区城南町永1209		
自己評価作成日	R3.10.22	評価結果市町村受理日	令和3年12月22日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/32/51070.html
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和3年11月9日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

理念に基づいてご利用者の個性を色々な角度から考察し、その人らしい生活が出来るような取り組みができていと思う。また、ご家族から見慣れた職員のため安心感があり、信頼関係もある程度築いていると確信している。環境面では広い敷地で田園地帯に囲まれる静かな環境にあるため、ゆったりとした時間が流れている。敷地内のグラウンドでは、グラウンドゴルフ大会を年4回開催している。春には満開の桜の下で、職員・利用者様共に花見を楽しめている。七夕交流会では、近くの保育園児達が毎年慰問に来られ私達を楽しませてくれる。季節の行事も盛りだくさんで年間を通し楽しめる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

今年度はコロナ感染症対策を徹底する中で、例年であれば2ヶ月月に行ってきた家族会に代えたアンケート調査により家族の生の声をサービスに反映させ、外出制限の中で併設のグラウンド散歩やドライブ、室内行事等今できる最大限の楽しみ事(夏祭りでは浴衣での盆踊り、運動会等)を支援している。入居者9名といつも深く関わることが楽しみとして、笑顔ある自然体でのケアに取り組む職員の姿勢は、“本当の家族と考え、共に喜び…”とする理念が反映している。開設時からのあまり変動の無い職員体制や、管理者を中心として風通しの良い職員体制はアイデアも豊富であり、入居者個々の違いを把握し、コミュニケーションを図りながら好きな事などを把握し、『そのらしい生活』を支援する為の努力を惜しまないホームであり、コロナ収束後には、例年通りの地域住民や保育園児との交流再開に期待されるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「一人ひとりが地域の中で自立した幸せな日常生活を送る」ための文言が理念の中で謳われており、毎朝唱和する事で、理念の共有を図りながら実践につなげている。	毎日の唱和により理念を意識したケアを実践するよう努めている。入居者の『自分のことは、自分で』との思いに、職員の少しの関わりで生活される様子に、理念の中で謳う“自立した幸せな日常生活”が表われている。入職時には勉強会の中で理念及び指針を説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	区の一員として会報の回覧、併設グラウンドの地域への開放、また当法人主催のグラウンドゴルフ大会の開催、地域運営推進会議メンバー等地域に根差している。	散歩に出かけながら近くの民家に咲く花を愛でたり、自治会に加入し会報の回覧、地域住民への併設グラウンドをゴルフ会場としての提供、例年であれば神社掃除や園児との交流等地域の中の一員として活動している。コロナ禍により、これまで通りの地域との交流は難しい状況ではあるが、グラウンドゴルフ大会を年末には開催する意向である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域運営推進会議のメンバーに自治会長、民生委員、老人会長、保育園園長、グラウンドゴルフ協会役員等の方々がいらっしやるので、地域の様々なケースを皆で共有するような取り組みをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍の中、文書による会議になり意見の交換等難しい状況にある。	現在は書面審議として、入居者概要や事故・ヒヤリハット報告、地域との交流及び行事等を報告する体制としている。構成メンバーには、報告書と「永の郷便り」を配布して回り、意見等を聞き取りしている。家族には家族会の中で報告する事としているが、家族会は現在コロナ禍により中止されている。	高齢者支援センターささえりあ、自治会長・民生委員、老人会長、校区グラウンドゴルフ協会、保育園長の他、理事長等ホーム関係者の充実したメンバー構成である。この会議が開催される状況になった場合には、家族にも参加を促され、多方面からの意見交換に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域包括支援センター中心の地域ネットワークには常に参加し、協力関係を築いている。	運営推進会議の資料を持ち届けながらの情報交換や、地域包括支援センターを中心とした地域ネットワーク会議（現在はオンライン会議）への参加、地域包括支援センターの相談による入居等協力関係を築いている。また、市からの介護相談員派遣に向けたアンケート調査や、新型コロナ関係での連絡等より密接な関係が築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所は「NO虐待・身体拘束」を掲げており、研修会に参加したり、職員勉強会・委員会を開いている。	身体拘束適正化として、理事長・管理者・施設長をメンバーとして委員会を開催している。また、勉強会では、職員の声掛け・言葉使いを挙げ、特に転倒危険性による立ち上がりへの声掛けに、筋力をつける為のスクワットとしようにと指導している。ホームでは、『NO虐待・身体拘束』を掲示することで職員への啓発とし、廊下にカメラを設置し抑止力の一環としている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職場内研修では、県のライブラリーの資料での勉強会や、ニュースなどで取り上げられた事件を朝礼や勉強会での議題にし何故そのようなことが起こったのか、どうしたら防げるのか等皆で考えるという事を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ご利用者様の中には直系の家族がおられない方や成年後見人がおられる方もいらっしゃるのでもいつも考えている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前には何度もお会いし細かい説明や疑問点には納得いかれるまでお答えしている。契約にもかなりの時間を費やしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	以前は年6回の家族会の場でオープンに意見交換ができていたが今はコロナ禍で開催できていない。ご家族の面会時や電話連絡時にはご家族の思いをお聞きし、年1回のご家族様アンケートで忌憚ないご意見をお聞きしている。	家族との意見交換の場として2ヶ月毎に家族会が開催されていたが、コロナ禍で中止となり、家族宛にアンケート調査を行い、ケア向上に努めている。(内容として職員の接遇、言葉使い、年間行事や食事面及び諸経費等) 家族の面会は外での対面や、玄関等を活用した面会として、家族の要望等を把握している。	家族のアンケートが生の意見であると捉え、家族の声をケアに反させるべく勉強会が開催されている。運営推進会議も意見や要望等を出す機会や、ホームに関わる地域住民や関係機関との接点としても生かされる機会であり、家族の参加へ向け検討いただきたい。また、家族会が再開できるように期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職場内勉強会の場では必ず今の職場の現状を皆に一言ずつ発言してもらうようにしている。中々本音が言えない場合もあるが個々に面談し皆の意見を聞く場を設けている。	管理者はケアに入りながら職員とのコミュニケーションを図り、朝から入居者のケアや薬への対応等適時話し合い、情報を共有している。家族の意見をもとにした勉強会や、管理者は何かあれば職員と面接しながら、意見や提案を収集している。代表者もホームに足を運び、入居者の現状や職員の状況を把握されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者も週1回のペースで事業所に来て職場の雰囲気等の把握に力を入れている。また、職員との個人面談を行いコミュニケーションを図り個々の意見をくみ上げている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内の勉強会は月1回ペースで実施している。また、行政・社協・包括・ブロック会等の勉強会には積極的に参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	包括を中心にネットワークができています。情報を持ち寄り勉強会や情報交換ができています。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の困っていること、不安、要望等に耳を傾け安心して生活できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご利用前にかかりの時間をかけ情報を集めるように努めている。また、本人への面談は必ず実行している。さらに契約時にも改めて話を聞いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所されてからしばらくは、ご家族にも特にご協力いただき、職員全員が緊張感をもって細かい観察に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員には理念をしっかり理解してもらい実現に向けて努力するよう勉強会や研修にて話し合っているため、ご本人には家族と同様の意識で生活できていると思う。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	開かれたホーム作りを目指しているため、いつでも気軽にご家族には来ていただき、職員がご家族のお尋ねにだれでも回答できるようにしているつもりである。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	近親者の供養や墓参り、また年の節目等はできる限り家族や馴染みの方々と時間を共にしていただいている。しかしコロナ禍の中それも中々思うようには実践できていない。	例年であれば、馴染みの関係を継続するための支援に取り組まれていたが、現在は家族中心であり、季節毎の行事を工夫して支援している。職員との受診後に家に立ち寄り、コンビニでの買い物など社会性の継続や、選択する喜び等今できる最大限の支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	馴染みの関係が構築できると、席を隣同士にしたりレクや散歩を一緒にしたりと安心して生活できるようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後には家族との関係が良好に運ぶよう、電話でのフォローにより相談に乗っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	今やりたい希望を叶えられるように、迅速に対応している。受診の帰りにはコンビニにて買い物したり帰宅希望時には家族と調整を図っている。	職員は入居者の食べたいもの等を聞き取りしたり、レクリエーションの中で入居者一人ひとり違うと捉え、個々が好きな事に挑戦してもらっている。意思疎通・発語困難な状況には、家族からの聞き取りや以前の利用施設等から把握し、本人本位になるよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族からの話を尊重し、本人とのコミュニケーションや行動の中から今の生活をより本人の意向に近づけられるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご本人の一日の生活動向の観察に主眼を置き、起床時のバイタルチェック、レク等の参加状況、生活リハ依頼の引き受け方などから現状把握するように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者は、職員よりその考えや思いを聞き取り皆様の状況を細かく把握し、良い介護計画ができています。モニタリングは各職員からの記載をもとに計画に反映させています。	入居時のカンファレンス及びアセスメント等により家族・入居者の思い等をリサーチしている。6ヶ月の長期目標を立て、3ヶ月毎のモニタリングにより達成度や本人・家族の満足度を踏まえ継続の可否を見極め、半年毎には基本情報から見直し新たなプランが作成されている。本人・家族の思い及び職員の気づきが反映されたプランが作成されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	各職員の気づきや工夫、情報の共有を密にし日々実践している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	皆様には、いかに自由な空間の中で生活していただくかを職員間のテーマに取り組んでいるので、かなりの部分既存のサービスにとらわれないケアを実践していると思う。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域との関係強化などで有効な社会資源を上手く活用しながら皆様方の豊かな暮らしを楽しんでいただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご家族の意向を大切に、家族、職員と連携して通院支援している。状態変化があればかかりつけ医に電話し指示を仰いでいる。	内科や専門医など本人・家族の希望する医療機関への受診を支援している。受診結果や日々の健康状態については、家族との共有を図り、質問や相談に応じている。歯科については必要時に訪問診療を支援し、月2回口腔ケアを受けている方もおられる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同一敷地内の他事業所の看護師に迅速に診てもらったり、相談して適切に受信、看護を受けられるように支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	ご家族、病院関係の方とは密に連絡を取っている。以前は職員も交代で面会し、洗濯物の交換等していたがコロナ禍で今は難しくなっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	当事業所としては看取りは行っていないが、ご家族様との信頼関係から当事業所にて最期を迎えさせてやりたいとの声多く、現在当事業所にて出来る精一杯のことを行っている。	入居時にホームでは終末期支援は行っておらず、医療が中心となると入院での対応となり、ギリギリまでの支援に努めている事を説明している。入院後はコロナ感染症への対応から病院での面会が制限されることから、ホームでは対策を施しながら出来る家族との会話、面会の機会を支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	最低限の応急処置、その後の手順は学習できている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時の避難訓練を行い職員間で避難方法、道順の共有ができています。また、台風時実際の全員避難を経験した事により良い点悪い点をハッキリすることができました。	年2回火災訓練を実施し、避難誘導方法を共有している。安全管理の一つとして、コンセンートの埃などにも注意を払うことや、災害備蓄については、リストの作成には至っていないが、水や避難キットなどを確保している。自然災害については実際、昨年台風10号接近予報が出された際は、地域公民館に避難しており、その後報告書を作成している。	昨年の台風接近避難後に作成された報告書を活かした災害対策に期待したい。また、防災に対する意識の高い地域であり、引き続き協力体制の構築を課題として検討されることが期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの特性や個性を見つけ出し、出来ることを自身でやって頂くことこそ人格の尊重につながると思う。	プライバシーの確保については、拘束に関することも含めて研修会により周知を図っている。呼称は苗字や同姓者がおられる場合は、下の名前でも対応している。また、入浴をはじめ同性介助への要望があれば応じている。身だしなみやおしゃれの支援として、髪は訪問カットで対応し、お化粧をされる方にも本人が継続して行えるよう、不足時は家族へ連絡するなど必要なサポートに努めている。	玄関内に置かれた外部訪問者の記録用紙については、個別や記入箇所をカバーするなど工夫が期待される。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の困っていること、不安、要望等に耳を傾け安心して生活できるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々のペースを大切にする事と、共同生活を楽しむことは相反する事もあるが、業務優先にならないように、いつも葛藤しながら取り組んでいる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時の洗面、食後の着替え、入浴後の爪切り、化粧、外出時の身だしなみ等色々な場面で支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	皆様の出来る範囲で準備、片づけを一緒にしている。また、個々に応じた食事形態を提供している。	サービスの向上につながるアンケートの食に関する項目から得た内容を活かし、入居者の楽しみとなる食事支援に取り組んでいる。献立や食材購入も職員が行っており、季節を取り入れながら、誕生日には、その方の好みのメニューを提供している。甘いものを好まれる方も多く、饅頭などおやつの時間に提供している。畑には入居者と一緒に管理している野菜(大根・ブロッコリーなど)が実り、特に小ねぎは必要な時、必要な分活用されている。家族の要望もあり献立表を送付している。	食形態もきざみやペーストなど個々に応じて準備しながら、必要な介助が行われている。今後も入居者の楽しみとなる手作りの食事支援が継続されることを期待したい。また、入居者の代弁者としての検食簿の活用に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々に合った食事量を提供している。一日の摂取量の記録水分量の確保には気を配っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの重要性は職員、ご家族とも理解しているのでちからを注いでいる。月に2回の訪問歯科による口腔ケアを受けられる方々もおられる。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンが把握できているので、ほぼ実践できていると思う。寝たきりの方でも日中はトイレでの排泄を基本に行っている。	把握したパターンを職員間で共有し、基本的に日中はトイレでの排泄を、夜間もトイレやポータブルトイレの使用など個々に応じて支援している。リハビリパンツを使用される方にもパットの使い分けを検討している。トイレは3か所設けられ、使い慣れた居室の近くへ誘導や見守りに努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々の排便パターンは把握できているので、排便コントロールはできている。また、散歩や運動をする事で自然排便を促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週3回入浴していただいている。おせんがある場合等はその都度入浴されている。	月曜から土曜までを入浴支援日とし、基本的に週3回入ってもらえるようにしている。汚染時はその都度支援し、清潔保持に努めている。風邪ひくからと拒否をされる方にも、無理強いせず声掛けを工夫している。季節のしょうぶ湯などは継続して取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝、起床時間は設定していない。その方一人ひとりのサイクルに合うようにしているので、皆様方良く眠られている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬支援はご利用者の命に直結する問題なので職員一人ひとり自覚し最新の注意を払っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一日の生活にリズムを付ける意味で「体操」「今月の歌」を皆様と決めている。また、グラウンドでは散歩、季節の花見、畑での野菜の収穫なども楽しみの一つにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節感を味わえるように月1程度のドライブを予定している。コロナ禍の前はご家族によるドライブも行っていたが今は中々この状況では難しくなっている。	感染症への対策を徹底した外出を支援している。お茶とお菓子で外気浴をしながらの桜見や、夏場も暑くない時は散歩、ベランダでの日光浴は継続している。また、ドライブを兼ねて10月にはひまわり見学に出かけ、イチョウ見学も予定されている。病院受診の途中「私の家はこっちょ！」と道案内され自宅へ立ち寄ったり、コンビニで買い物等個別の支援している。	コロナ禍以前は面会時にホーム敷地内を一緒に散歩したり、ドライブを楽しまれる家族もおられたとのこと、新型コロナウイルスの早い収束が待たれる。また、以前のような外出が難しい分、ホーム内での楽しみごとを企画されており、今年度は運動会等工夫されており、今後も職員のアイデアに大いに期待したい

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理ができればの方が極めて少ないので、買い物希望がえられる方は外出時に一緒に買い物することもある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話を掛けたいと言われる方や年賀状を書かれるときは職員が付き添い支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間の温度管理や照明の明るさの度合いには気を配っている。季節の花など飾るが異食されるなどあり難しさを感じる。	コロナ感染症への対応として、室内の衛生管理と、玄関先での手指、衣類、靴の消毒をはじめ、席の配置や向きにも十分配慮している。リビングなどの共用空間に庭先や散歩時に摘んだ草花、近隣者からいただく花などを取り入れたい意向もあるが、異食への対応から、玄関内に飾ったり壁面などにより、季節を醸している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブルの大きさや配置、気の合うお友達など、いつも職員で思案している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人やご家族の意思を尊重して配置していただいているが、レイアウトでご本人にリスクが考えられる時には職員がアドバイスする場合がある。	居室には使い慣れた物品などをの持ち込みや、家族の思いが伝わるような環境も安心されることを伝えている。当初、サイドボードや椅子などの家具も持ち込まれているが、転倒のリスクなどが発生した場合は撤去を含めて検討している。コロナにより家族が部屋に入れないため、職員の取組みを伝えることで安心につなげている。	入居者は就寝以外も食後など自由に部屋に戻り一休みされている方もおられた。今後も居室は一人ひとりのプライベートの空間として、本人にとっての馴染みや必要な品、家族の思いのある品々の配置を期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	スプリンクラー及び火災通報装置の設置が済んでおり、より安心していただける空間になっていると思う。		